

「パリ文化」考 — 『レ・ミゼラブル』と下水道 —

高瀬英彦

「文化」はしばしば伝播し、混交・融合して新たな文化を生むこともあるが、模倣の域を出ないままのものも多い。しかし、模倣文化とは別に、「固有の文化」からは歴史、風土の香りがする。今、パリには固有の文化として「カフェ」「メトロ」「下水道」がある。似たものは世界中の都市にもある。日本で似たものといえば、カフェは「喫茶店」、メトロは「地下鉄」、下水道は「下水」と呼ばれているものだろう。

しかし、パリのカフェは「カフェ」である。「カフェ」隆盛の発端は 1686 年シチリア人のプロコップが現在のアンシェヌ・コメディ街に店を開いた頃に遡る。啓蒙時代には、ボルテール、ディドロ、ボーマルシェなど文人、役者などの溜まり場であり、革命期にはダントン、マラー、ロベスピエールなどが客だったという。革命前 17 世紀依頼、貴族・上層ブルジョワには「サロン」があり、中小ブルジョワ・行動的知識人・庶民には「カフェ」があった。中小ブルジョワ・行動的知識人にとっては「新しい知識を練り上げる場」、庶民にとっては寒い季節には暖房費の節約をかねた「団欒の場」、大戦中はレジスタンスにとって、ナチの目を逃れて情報交換を行う「作戦会議の場」としての顔を持つ。今では、軽食、アルコール飲料も供する大道にオープンな「いこいの場」である。日本の「喫茶店」にはない顔といえよう。

パリのメトロは「メトロ」である。(ロンドンではチューブ、アメリカではサブウェイ) である。「メトロ」は 1900 年に開通し、現在パリ運輸公社が 15 路線 192km (うち 177km が地下) を運営している。他の都市同様、郊外高速地下鉄 (R.E.R.) も乗り入れ、市内、市内と郊外を結ぶ大量輸送機関として市民生活には欠かせぬ文化機器である。パリの「メトロ」のユニークな点といえば、改札を出るまでの全線均一料金、タイヤ走行、手動のドア開閉、通路のミュージシャン、ときたま出没するスリといったところか。

ところで、パリの下水道はヴィクトル・ユゴー (1802 ~ 1885) の『レ・ミゼラブル』で一躍世界中に知られるところとなった。『レ・ミゼラブル』は当時の社会の悲惨を扱った一大叙事詩だが 1845 年に着手された後、やっと 1860 年に完成の日を迎えた。その成功は電撃的で、一世紀以上その衰えるところを知らない。この人間絵巻の中のジャン・バルジャンをはじめ、ミリエル司教、ファンチーフ、コゼット、テナルディエ夫婦、ジャベール刑事、マリユスなど、それぞれ当時の歴史的境遇を背負った登場人物はフランスの国家的伝説の人物と言われるまでになっ

た。ところで、この大作にして名作「レ・ミゼラブル」は社会の悲惨を描きつつ、人間の善意と、努力による社会の改善を訴える書でもあるが、この小説の最終 第五部の第二編「怪物の腸 (はらわた)」—第一章「海のために痩せる土地」から第六章「将来の進歩」—までが、パリの下水道を有名にした部分であり、ドキュメンタリータッチのユゴーの下水道についての一文化論であるといえよう。したがって、パリの下水道は単なる下水ではなく、歴史ある「下水道」であって、今日でも大衆一般の目につかないが、独特の文化を形成しているといえる。

「文化」とは、E.B. タイラーによると「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や慣習の複合総体」であるという。こういった包括的な文化の概念をせばめて、「観念体系としての文化」としての立場をとる W. グッドイナフやレビ・ストロフ、「象徴体系としての文化」としてとらえる D. シュナイダーなどがある。この二つのアプローチとは異なった「適応体系としての文化」ととらえる B.J. メガーズは「人間は一個の動物であり、したがって他のすべての動物と同様、その生存のためには、周囲の環境との適応関係を維持していかなければならない。人間は主として文化を媒介としてこの適応を上げてゆく」という。ここでは、パリの下水道を「社会的適応の文化」のひとつとしてとらえ『レ・ミゼラブル』を手掛かりに、パリの「下水道文化」のメモにしたい。

19世紀のパリは膨張する都市であり、繁栄と住民増加のため排水・排泥が及ばず、「泥の都」と呼ばれていた。ローマ時代から下水道はそれなりにあったが、現在の下水道のように整備されるまでには、紆余曲折があった。19世紀のパリ、セーヌ川の水は汚れ、不衛生極まりなかった。人口増加に伴って給水・排水の問題を解決することが衛生面からも急務の課題だった。

必要な水の確保はウルク運河の完成（1825年1月）で事なきを得たが、運河による給水量の増大は、道路の整備と下水道の建設を伴わない限り、パリは汚水で溢れることになった。

パリの下水道は第二帝政（ルイ・ナポレオン＝ナポレオンⅢ）期に、セーヌ県知事オスマン男爵によって飛躍的に整備が進んだ。

ウルク運河の完成から20年後、1846年、パリ商工会議所のオラス・セイは「パリにおいては道路舗装の性格は完全に变化した。この大事業は配水施設、道路洗浄、路面に傾斜を与えて下水溝への排水をよくすることなどを相互に関連させて実施されねばならなかった。歩道の建設、中央部のくぼんだ道路から路央が盛り上がった道路への変化は、交通を容易にした。下水溝への排水がうまくいくように考えられたこの道路の構造は、これまで道路をさまざまな方向に断ち切って掘られていた排水溝を、次々に消滅させていった....」と書いている。

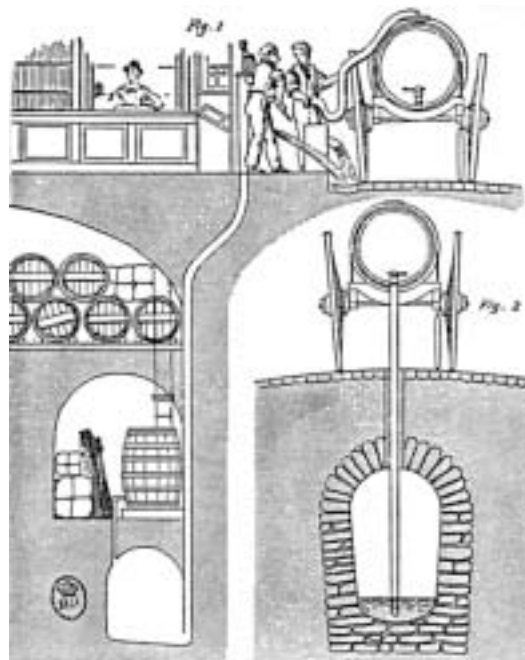
さて、『レ・ミゼラブル』の最終章 第五部 第一編「市街戦」では、ルイ・ナポレオン（ナ

〔当時の街路の排水路〕



中央部のくぼんだ道路。路面の水は中央に集まり地下の下水溝へ排出する。この構造だと道路幅が広くなるに従い、排水がうまくいかなくなる。

〔当時の商店・ホテルの便所の一形式〕



考案された便所の一形式。商店やホテルのためのものである。地下室が三層になっているが、この二層目に樽を設置し、固形部分はここに溜まる。液状部分は、樽の中心を通る管に、その管にあげられた小孔を通してはいり、第三層の地下室に溜まる。固形部分は樽のまま搬出、液状部分は図の如くポンプで排出し下水溝に流す。

ポレオン」) 派と共和派との内戦の様相が描かれている。その頃、すでに老境に達していたジャン・バルジャンは、美しく育った養女コゼットをいつかは自分の手元からさらっていくであろうゴゼットの恋人マリユス(共和派)が市街戦で傷つく現場に居合わせる。ジャン・バルジャンは負傷したマリユスを助けるべく、老体に力をこめてマリユスを背負い現場を去る。あの有名な「下水道の逃避行」が始まるのは、第二十四章「捕虜」からである。

一 第五部「ジャン・バルジャン」第一編「市街戦」 第二十四章「捕虜」一

「マリユスはなお戦っていたが、全身傷におおわれ、ことに頭部がはなはだしく、顔は血の下に見えなくなり、あたかもまっかなハンカチを顔にかぶせたようだった。(…)倒れかかった時うしろから彼を捕らえた手、意識を失いながら掴まれるのを感じた手はジャン・バルジャンの手であった。マリユスは捕虜になっていた。ジャン・バルジャンの捕虜になっていたのだ。(…)気を失っているマリユスを腕にかかえ、防塞の中の舗石のない空道を横切り、コラン亭の角の向こうに身を隠したジャン・バルジャンは(…)狂乱の体になって切羽詰まった猛烈さで地面をながめ、あたかもおのれの目でそこに穴を開けようとしているかとも思われた。ながめているうちに

、(...) 積み重ねられた舗石の乱れてる下に半ば隠されて、地面と水平に平たく置かれている鉄格子を、彼は見つけたのである。(...) 上に重なっている舗石をはねのけ、鉄格子を引き上げ、死体のようにぐったりとなっているマリユスを肩にかつぎ、背中にその重荷をつけたまま、肘と膝の力によって、幸いにもあまり深くない井戸のようなその穴の中におりてゆき、頭の上に重い鉄の蓋をおろし、その上に舗石を自然に落ちてこさせ、地下三メートルの所にある舗石の面に足を下ろすことをあたかも巨人の力と驚の迅速さをもつてなし遂げた。かくてジャン・バルジャンは、まだ気を失っているマリユスと共に、地下の長い廊下みたいなものの中に出た。そこは、深い静穏や、まったくの沈黙、闇夜のみであった。(...) ジャン・バルジャンが入り込んだのは、パリの下水道の中へだった。」



マリユスを背負って下水道に逃れたジャン・バルジャンは、第三編「泥土にして霊」第八章「裂き取られた上着の一片」で、警官隊に追われながらも下水道からセーヌ河畔に出るが、二人が通った下水道はこういった当時の整備途中の暗闇の世界であった。

第三編「泥土にして霊」の第一章「下水道とその意外なもらい物」から第八章「裂き取られた上着の一片」でセーヌ川にたどり着くまでは、さまよい歩くジャン・バルジャンの姿の描写にあてられている。(意外な貰い物とは追手の警官隊をさしている。)

第三編「泥土にして霊」の第一章「下水道とその意外なもらい物」

「(...) 隧道の角を曲がると、穴の中からさしていた遠い光は消えてしまい、暗黒の幕が再び垂れてきて、彼はまた目が見えなくなった。それでも彼は前進をやめずに、できるだけ早く進んだ。マリユスの両腕は彼の首のまわりにからみ、両足は背後にたれていた。その両腕を彼は一方の手で押さえ、他の手で壁を伝った。マリユスの頬は彼の頬に接し、血のためにそのままこびりついた。彼はマリユスの生温かい血が自分の上に流れかかって、ふくの下までしみ通るのを覚えた。けれども、負傷者の口元に接している耳に湿気の或る温味が感ぜられるのは、呼吸のしるしで、従ってまた生命のしるしだった。今や彼がたどってる隧道は、初めより広くなっていた。彼はかなり骨を折ってそれを歩いていった。前日の雨水はまだまったく流れ去ってはず、底の中ほどに小さな急流を作っていたので、彼は水の中に足を踏み入れないようにするため、壁に身を寄せて行かねばならなかった。そういうふうにして彼はひそかに足を運んだ。あたかも見えない中を手探りして地下の闇の脈の中に没してゆく夜の生物のようだった。

けれども、あるいは遠い穴からわずかの明かりがその不透明な靄の中に漂ってるのか、あるいは目が暗闇に慣れてくるのか、少しずつぼんやりした影が見え、手であつた壁や頭の上の丸天井などが漠然とわかってきた。魂が不幸のうちに拡大してついにそこに神を見いだすに至ると同じように、瞳孔は暗夜のうちに拡大してついにそこに明るみを見いだすに似るものである。行く手を定めることは困難であった。下水道の線は、上に重なっている街路の線を言わば写し出しているものである。パリのうちには当時二千二百の街路があった。(…)ジャン・バルジャンは下水道の交差するところに入り込んだ。そこは道に迷う入り口でもあった。(…)実を言えば、彼はしだいにある恐怖の情にとらえられていた。彼を包んでいた影は彼の精神の中にもはいつてきた。彼は一つの謎の中を歩いていたのである。その汚水の道は実に恐るべきものである。眩惑をおこさせるまでに入り組んでいる。その暗黒のパリのうちにとらえられる時、人は慄然たらざるを得ない。ジャン・バルジャンは目に見えない道を探り出してゆかなければならなかった。否ほとんど道を作り出してゆかなければならなかった。その不可知の世界においては、踏み出してみる各一步は、それが最後の一步となるかも知れなかった。いかにしてそこから出られるであろうか。出口が見つかるだろうか。しかも時期おくれにならないうちに出口が見つかるであろうか。石造りの蜂の巣のようなその巨大な地下の海綿は、彼に中を通りぬけさせるであろうか？(…)突然彼は意外な驚きを感じた。最も思いがけない瞬間に、そしてやまらずに進みつづけていた時に、傾斜を上がっているのではないことに気付いた。水の流れは、爪先からこないで、踵の方に当たっていた。下水道は今下り坂になっていた。どうしたわけだろう。(…)

パリの下水道は上流から下流へ流れる、自然流下式を採用していたので「下り坂」というのはセヌ川に近づいていることを暗示している。が、この後、第八章「引き裂かれた上着の一片」まで警官隊の追手を背にしつつ逃げる二人の姿が続く。

ところで、第一編と第三編に挟まれた第二編「怪物の腸」第一章～第六章まではドキュメントタッチのユゴーの「下水道論」といえるものである。以下に要約と引用で概略を見る。

第二編「怪物の腸」

★第一章「海のために痩せる土地」は一汚泥を再利用する必要性を訴えたものである。

「(…)パリは年に二千五百万フランの金を水に投じている。(…)腸を通して。曰く、下水を通して。(…)人間からでる肥料、養分を土地に返さず、富を下水道から川に、川から滔々と大洋に吐き出している。(…)」

★第二章「下水道の昔の歴史」は下水道は生活の便になるよりも、恐怖の源であった一こと。

「(…)汚水溜めや下水道は、中世や後期ローマ帝国や古い東方諸国などにおいて、牢獄の役目をなしていた。疫病はそこから発し、専制君主らはそこに死んだ(…)人間の歴史は下水溝渠の歴史に反映している。死体投棄の溝渠はローマの歴史を語っていた。パリの下水道は古い恐るべ

きものであった。それは墳墓でもあり、避難所でもあった。罪悪、知力、社会の抗議、信仰の自由、思想、窃盗、人間の法律が追跡するまたは追跡したすべてのものは、その穴の中に身を隠していた。(…)」

★第三章「ブリュヌゾー」—ユゴーの友人、当時の下水道網の明細図を作った人物の紹介—

「(…)パリの下水道は、中世においては伝説的な状態にあった。16世紀に、アンリ二世はその測量を試みたが、失敗に終わった。メルシエの立証するところによれば、今から百年足らず前までは、下水道はまったく放棄されていて、なるがままに任されていた。(…)内務大臣はナポレオンに言った。

—陛下、私は昨日、帝国において最も勇敢な男に会いました — どういう男だ？

—ある事をしたいと申しております — 何を？

—パリの下水道に入ってみようと思っております

その男は実在の人物で、ブリュヌゾーという名であった。」

★第四章「世に知られざる事がら」—地下道に残されていた、種々の遺物の発見と、ブリュヌゾーの作業—

「(…)パリの地下の汚水溝渠を全部検分するには、一八〇五年から一二年まで七年間を要した。進にしたがってブリュヌゾーは、種々の大事業を計画し、指揮し、成就した。(…)かくのごとくして十九世紀の初めには、旧社会はその二重底を清め下水道の化粧をした。とにかくそれだけ清潔になったわけである。(…)」

★第五章「現在の進歩」—ブリュヌゾーの努力で改善されたが、まだ安心できない下水道—

「(…)もう汚水溝渠には初めのような獐猛さは少しもない。今日雨水は下水道を洗い清めてたとは言えあまり安心しすぎてはいけない。有毒ガスはまだそこに住んでいる。完全無欠というよりも、むしろ偽善であった。(…)全体より見れば汚水の掃討は下水道が文明に尽くす務めであるから(…)確かにパリの下水道は改善されたわけである。それは進歩以上である。一つの変形である。昔の下水道と現今の下水道との間には、一大革命がある。そしてその革命は誰がなしたか？ 世人に忘れられている、かのブリュヌゾーである。」

★第六章「将来の進歩」—汚泥・汚穢を肥料として土地に戻して得られる効果—

「(…)パリの地下の迷路は今日、十九世紀の初めより十倍もの大きさになっている。その汚水を今日のような比較的完全な状態にするには、いかばかりの忍耐と努力がいったことか！(…)下水道の洗浄と言う語、それは、汚穢を土地に返す事である。汚穢を土地に送り、肥料を田畑に送ることである。この簡単な一事によって、社会全体が貧窮の減少と健康の増進とを得るのである。(…)」

このように六章にわたって、読者はパリの下水道の過去、現在・未来をたどるが、次の第三編

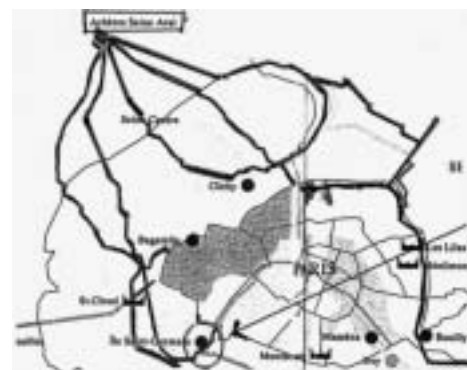
以降、ジャン・バルジャンが暗闇の地下下水道を移動しながら地上の街路、地下の自分たちの現在地を推測するジャン・バルジャンの姿は下水道の専門家、技師とも思える筆づかいで詳細を究めている。これは当時の下水道網の明細図を作成したユゴーの友人、ブリュヌゾーの影響、協力があって書かれたにちがいない。

ところで、日本語には「水に流す」過去のことをとやかく言わず、すべて無かったことにするという表現があるが、フランス語には「水で流す」つまりすべてを下水へ (Tout-a-l'égout) という表現がある。パリジャン・パリジェンヌたちはタバコの吸殻、紙屑などちょっとした小物は灰皿やごみ箱に捨てずに、全て床や歩道に平気でポイ捨てする。これがパリの生活習慣である。カフェは朝、前日の客が床に捨てたゴミを店先の歩道に掃きだしておく。市の作業員がビニール製の箒で歩道のすべてのゴミを車道の路肩に掃き落として歩く。朝か夕方、車道と歩道との境に水が流される。ゴミはその流れに乗って路肩の開口部に流れ落ちる。これがパリの「下水道文化」への入口である。家庭、ホテルの汚水は配管を通して、地上の雨水・ゴミは道路の開口部から第一 (小)、第二 (中)、第三 (幹線) の下水道へ導かれる。ゴミ処理を終えた汚水はパリ郊外の北にある Achères (アシェール) の下水処理場へ送られ、浄化してセーヌ川の下流へ放水というシステムになっている。



道路掃除夫はおもにアラブやアフリカの旧植民地からの出稼ぎで、青い菜っば服を着て (ただしこれは制服ではなく、私服のもいるが) 小枝を束ねてつくった長い帚を持って黙々と働いている。もっとも小枝の帚は最近姿を消してプラスチック製になったが、でも見た目にはまったく木の小枝の色と区別がつかない赤茶色の樹脂を用い、こまかい枝分かれの部分まで本物そっくりに再現してあるところなど、フランス人もなかなか芸がこまかい。

【アシェール下水処理場】

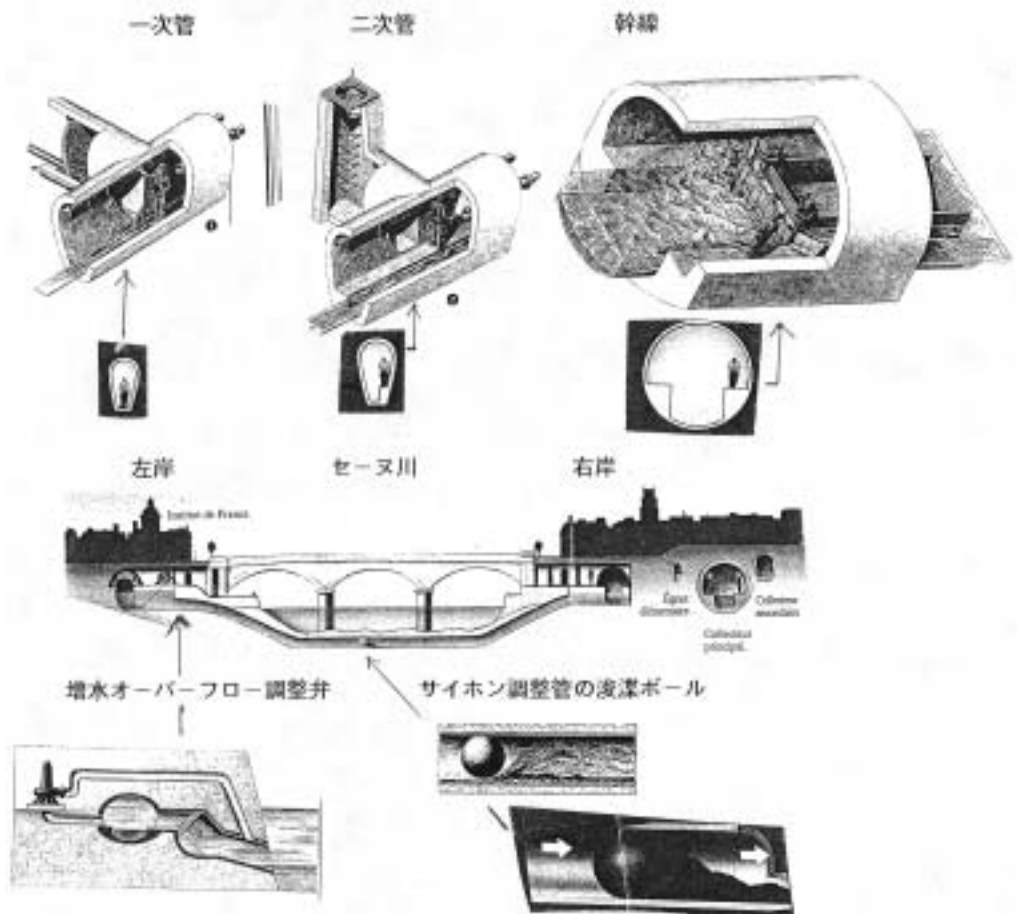


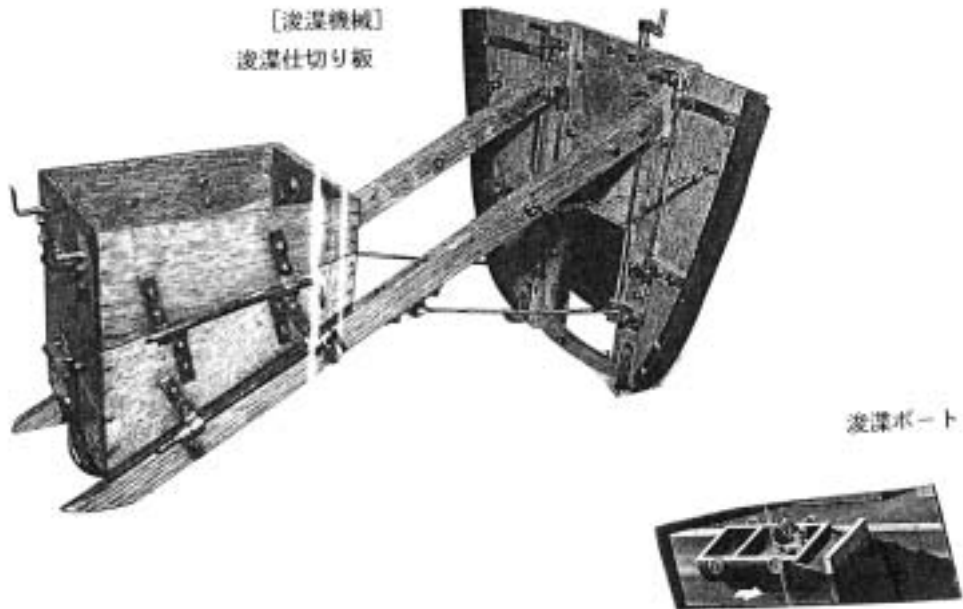
パリの下水道は四つの幹線からなっており、これに総延長 70 キロの副幹線、1300 キロの支線、61298 本、延べ 372 キロの排水溝から様々な生活排水が流れ込む。下水道の総延長は 2088 キロ、このうち人間が入ることのできるものが 1543 キロ。これらの下水道は地上の道路とおおむね対をなして、幅員 20 メートル以上の大通り場合には歩道の下を流れている。原則として 50 メートルおきにマンホールが設けられている。下水道にも、地上の道路と同じように、それぞれ固有の名前が付けられ、標識で示されている。

現在、エッフェル塔の足元、アルマ橋の左岸（南）角に、地下に降りる入り口がある。これが「下水道博物館」である。（金曜休館，11：00～1：20，3.80 ユーロ）。ここでは本物の下水を目の前にして、下水道の歴史や仕組み、浚渫・ごみ処理の仕組みを見学することができる。

このように文学作品で紹介され、現在もセーヌ川の汚染防止に寄与しているパリの下水道は、目に見えぬ「適応体系としての文化」を具現したものといえよう。それにしても 1800 年代に必要に迫られたからとはいえ、思い切って地上・地下の都市改造を進めようとした英断は、フランス人の驚くばかりの長期展望のある文化事業と言えよう。現在のパリの別称は「光の都」と

[現在の下水道の断面など]





いうが地上の華やかな光は目に見えぬ地下での地道な努力のおかげである。環境問題に対する炯眼さにも改めて注目に値する。また、下水道はパリの腸（はらわた）と例えられるが、都市を人間の体とみなしてみると、*「人間中心主義」*のフランス文化の一端、*「ユマニスム」*のあらわれというのは最良目であろうか。地盤堅固なパリには下水道に限らず、地下倉庫など生活のための地下空間の多様な利用と、（歴史を背景にしたカタコンベ、地下納骨堂、地下礼拝堂などは別にして）、パリの地下にもう一つの文化が多彩に花開いていることを忘れてはならない。

[参考文献]

- Horace Say, *Etude sur l'administration de la Ville et du département de la Seine*, Paris, 1846.
 Henri Sauval, *Histoire et recherche des antiquité de la Ville de Paris*, 3 vol, Paris, 1724.
 Jean Bouchary, *La compagnie des eaux de Paris et l'entreprise de l'Yvett*, Paris, 1946.
 P.S.Girard, *Recherche sur les eaux publiques de Paris. Les distributions successives qui en ont été faites, et les divers projets qui ont été proposés pour en augmenter le volume*, Paris 1812.
 A. Chevalier, *Mémoire sur les égouts de Paris, et de Londres, de Montpellier*, *Annales d'hygiène publique*, tome 19 (1838), p.366.
 Parent-Duchatelet, *Rapport sur les améliorations à introduire dans les fosses d'aisance, leur mode de vidange, et les voiries de la Ville de Paris*, *Hygiène publique ou mémoires*, tome 2, p.350.
 Parent-Duchatelet, *Essai sur les cloaques ou égouts de la Ville de Paris, envisagés sous le*

rapport de l'hygiène publique et de la topographie médicale de cette ville (1824), *Hygiène publique ou mémoire*, tome 1, p.156.

Victor Hugo, *les Misérables*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard.

Guide Gallimard, *Paris Secret*, Gallimard.

豊島与志雄訳, 『レ・ミゼラブル』 岩波書店

喜 安朗, 『パリの聖月曜日』 平凡社

参考: サン・セバスチャン通りとりボリ通りの交差点の地下空間の利用図

